

契丹陶磁の「周縁性」に関する検討 - 唾壺と陶枕を例に -

町田 吉隆*

Examining on the Border Character of the Kitai Pottery in China
: With the Spit Pots and the Pillows in the Liao Dynasty as examples

Yoshitaka MACHIDA*

ABSTRACT

We are able to find out an archaic style in the Kitai(契丹)Pottery. These styles are similar to the pottery in the Tang(唐)Dynasty rather than the pottery in the Northern Song(北宋)Dynasty of the same era(A.D.10-12c). In other words, the style of the Kitai pottery is the border character. This paper will survey one of the characteristics of the Kitai pottery. It seems reasonable to assume that the style of the Kitai pottery in the Liao Dynasty(遼朝) is not archaic but combined. We can see the combined feature in the Spit Pots(唾壺) and the Pillows(陶枕) of some strange shapes.

Keywords : pottery, Kitai(契丹), Liao Dynasty(遼朝), China, history

1. はじめに

10世紀初めから12世紀初めにかけて北東アジア、華北、内陸アジアにまたがる領域を支配した契丹国(遼朝、以下、「契丹国」と表記)の陶磁器のうち、その領域内で生産された陶磁器を、ここでは「契丹陶磁」と規定する。

契丹国の陶磁器には古風な特徴があることが指摘されている。それは10世紀から12世紀にかけて生産されたものであるにもかかわらず、むしろ唐代の陶磁器に類似しており、同時代の北宋時代の陶磁器とは異なる様式であることを意味する。そして、それはしばしば中心文化が地方へと波及する時差により遅れることを意味する「周縁性」として説明されてきた。この論考では契丹陶磁の有する「周縁性」という言説について検証を行い、その特色の実像と、そのような特徴が形成された要因について考えてみたい。具体的には唾壺(唾や破棄された飲食物を入れる壺)と陶枕(陶器の枕)を例として考察する。

2. 契丹陶磁の特色

筆者らは2008年度に中華人民共和国内蒙古自治区南東地域において、2009年度に同地域と遼寧省において契丹陶磁の調査を行った。後述する[図A]の白磁唾壺、[図B]の白磁陶枕は2008年度の調査において実施した写真測量による実測図である。筆者はその調査報告において、契丹陶磁の特色を考える上で7つの研究視点を指摘した。[1]

*一般科・准教授

遊牧民族的感覚を重視。

西アジア(イスラーム文化圏)との関係を重視。同時代の華北の諸窯(定窯、磁州窯など)との関係を重視。

渤海、五代、北宋などの文化的影響を重視。

北朝から唐代へと続いた文化が地方文化としての長く残存したことを重視。

鮮卑など北東アジアの伝統文化とのつながりを重視。

金朝、元朝へと続く非漢民族王朝のさきがけとしての性格を重視。

これらは契丹陶磁の持つ多面的な性格を考える時に重要な研究視点と考えられるが、同時に「契丹陶磁とは何か」という課題を理解し難いものになっているとも言える。

契丹国の陶磁器およびそれを生産していた陶磁器窯に最初に注目し、調査を行ったのは、鳥居龍蔵、黒田源次、田村實造、三上次男、小山富士夫の各氏ら日本人研究者であった。それは20世紀の前半、特に満洲国建国、日中戦争と続くことになる日本がこの地方の侵略を進めた時期に重なる。戦後、それらの調査に基づいた報告が刊行されたが、陶磁器において、最初にまとめた報告を行ったのは、黒田源次氏であった。その見解は「遼の陶磁は遼の地で焼成した特異なもので、中国の影響をうけたとはいえ、その間には素朴な塞外民族の嗜好が強調されて深い興味をそそられるのである。」と、遊牧民族的感覚を重視するものであった。また、「これらの調

査によっていえることは、遼代の陶磁の窯はいわゆる北方系に属する丸窯焼成であって、まったくその影響を華北地方からうけていることである。しかもその系統には定窯・磁州窯系と三彩系(唐三彩の系統)、それに瑠璃瓦系がある。また別に遼陽の缸官屯窯・撫順窯があって、これは民窯として、遼・金時代と後世にまで続いている。これらはその器物の性質上、同一の場所、同一の窯で焼成されない場合が多いことも古窯址の発掘によって証明されている。またその器形が、碗・蓋のごとくほとんど中国内地の製品と相違することのないものと、民族生活を反映した鶏冠壺・長壺等の遼の独特の形体をしたものや、蒙古高原に咲く野花を想わせるような素朴な写生的文様のものもあって、この陶磁に特異性を与えている。」と総括している。〔2〕

また当時の調査環境について、杉村勇造氏は、「遼時代いらいこの地方には独自の文化は発達せず、また漢文化も移入されずに近代にいたったので、草原砂漠の中に遺存するものは石器時代の遺物か遼時代の遺品で、他の時代の文化遺物はほとんど残存せず、荒涼たる広野に土城と孤塔がそびえる風景が存するのみであった。」と記しているが、その文化について、「これらの中で特殊な形式のものには彩釉の鶏冠壺や八稜形長盤などいくつかの種類があり、また白磁の鶏冠壺があってこれらは中国の陶磁にはない形式である。がんに遼王朝を興した契丹民族は草原の騎馬民族系統で、かれらの文化は古来から西域の影響を強く受けている。」と、先の黒田氏の総括に加え、西アジアとの関係を示唆している。〔3〕

戦前期の調査参加者で、かつ戦後もこの地方の文化財に関心を持ち続けた三上次男氏は「遼でははじめ、上流階級の必需品である白磁・青磁・黒磁などの陶磁器を、中国の五代諸国、次いで北宋から大量に輸入したが、輸入陶磁器だけでは需要に追いつけず、(略)自国でも陶磁器の生産をはじめた。(略)上京・中京・東京・南京などの大都市の近くには、窯場が生まれ、いろいろな種類の陶磁器が焼き続けられた。こうした遼の国内で遼人の手によって生産されたものが遼磁である。」と契丹陶磁こそが遼磁と規定している。〔4〕

その特徴は「遼では、隣接する五代諸国や北宋の陶磁器と、器種・器形・釉色・装飾技法・文様・文様構成などの点で、大なり小なり異なった陶磁が造られている。すなわち、器形は一般に大らかであり、また皮囊壺のように他に類をみない形のものでできている。長頸瓶や長壺も一見それとわかる特長がある。こうした器形は独特な文様・文様構成・釉調などともに、そのあるものは西アジアの工芸との類似を感じさせる。」とあって、やはり前代の唐や同時代の宋など中原の中国王朝文化の影響に対して、西

アジア(イスラーム文化圏)からの影響を相対的に大きく見ていることがわかる。〔5〕このような契丹陶磁に関する理解は、日本人研究者に踏襲されていく。佐藤雅彦氏が「それら遼の陶磁の性格をあげると、まず中国の風に近いものといえるだろう。早くから中国陶磁の影響下に生れたのだから、当然のことであろう。しかしそうはいっても、全く中国のおしきせに甘んじているわけではない。形やデザインの面には、中国とはちがう素朴で手強い風格が見られる。それが契丹の民族色なのであろう。更に言えば、遼の陶磁には多色の低火度釉を用いたものが多いが、こういう色釉の頻用は、単に唐三彩や宋三彩の刺激にだけ起因するものではなく、はるかに遠いペルシャやビザンチンの多色釉陶に負うところがあったのではないかと思える。」と述べているのはその例である〔6〕

近年、中国では契丹陶磁に関する研究熱が高まっている。その中でも先駆的な存在であった閻万章氏は「遼代陶磁の職人は、主に漢人や渤海人であった。このことは文献にはっきりとした記載はないが、しかしその他の遼代手工業の職人が同じような傾向であったこと、遼が中原地区の窯場のある州県から漢人を捕まえていること、また渤海地区から出土した陶磁器との類似性などから十分に推察できる。」と契丹陶磁を焼造したのは渤海や華北から移住させられた人々であったと記している〔7〕。また、李紅軍氏は「唐末・五代の中原地区の混乱により華北、特に幽、涿州(現在の河北省)の人々が多く亡命してきた。」と述べる。〔8〕

陶工の移住、技術移転の可能性はあるが、それでは契丹陶磁の特色と、彼らが出身地で焼造していた陶磁器との関連はどのように捉えられるのだろうか。近年の中国における研究は契丹陶磁を中国陶磁史の流れの中に位置づけるものであり、契丹国に影響を与えた存在として、唐(7世紀から10世紀)の陶磁器を重く見ることにつながる。確かに低火度鉛釉陶の「三彩」の系譜を考える場合、唐の影響は大きかったと考えるべきであろう。このベクトルをさらに発展させたのが、唐代の中央文化が地方に波及して、それが地方に定着・変容したと捉える見解である。唐ではすでに失われた器形、文様などが契丹陶磁に残存していると考えられる例は少ない。

小川裕充氏は契丹国時代の絵画について、「遼と西夏の絵画の特質は、その周縁性にある。」と述べている。そして時間的にずれ文化が波及し受容された結果、「遼の絵画が南北朝・隋唐時代のそれを受容して、逆に五代・北宋の絵画に影響をおよぼすほどの水準にまでいたった」とし、「唐的なより古い伝統を継承しつつ、宋的なより新たな創造を受容

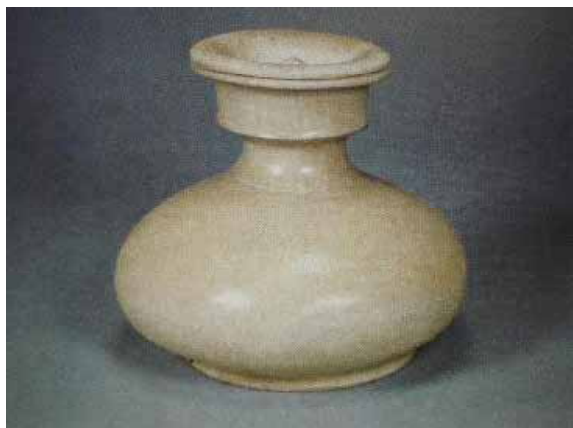
してゆく、遼の絵画のこのような性格」こそ、その「周縁性」の現れであると論じられた。〔9〕

このような考え方は陶磁器にも適用できるだろうか。そこで問題になるのが、個々の陶磁器（片）がどこで、どのように生産されたのかは、必ずしも自明ではないということである。弓場紀知氏は述べる。「遼墓から出土する陶磁器の中には、定窯、耀州窯・磁州窯、さらには南中国の越州窯や景德鎮窯の青磁や白磁が含まれ、厳密に遼独自の陶磁器のあり方をとらえることは、容易ではない。」「遼の国内で生産された陶磁が北宋の陶磁とどう影響関係を持つのかということや、北宋の陶磁がどういう形で遼の国内に入ったのかということもかならずしもはっきりとはしない。」「〔10〕いたづらに影響関係にとらわれない慎重な考察を進めると、「遼の領域の陶磁はその大半が中原、すなわち北宋の陶磁窯で生産された陶磁器によって、その供給はなされたのである。そうした流れの中でいわゆる遼磁は生産されたが、それが遼独自のスタイルと見ることは、かならずしも適当ではない。すなわち、北宋の陶磁の模倣の上に立って生産されたのが、遼磁なのである。」という見解に至る。〔10〕

以上のように、「契丹陶磁とは何か」をめぐる見解は複雑な様相を示している。その根底には契丹陶磁の多面的な要素を、どのように統一的に把握するかという課題がある。ここではまず原点に戻って、個々の器形から考えてみることにしたい。

3. 契丹国時代の唾壺（渣斗）

唾壺は現代の日本では用いられなくなった容器である。唾壺とは「扁球形の胴部に漏斗状に大きく開いた口頸部が付属した形状を呈する。中国では、金属器や漆器に漢時代まで遡る事例があり、六朝～唐時代には浙江省の越州窯などで陶磁器の唾壺も盛んに生産されていた。」「〔11〕〔写真 〕は隋から唐代初期にかけて作られたと思われる白磁唾壺である。（『世界陶磁全集 11』小学館 1976,p.30より転載）



〔写真 〕 白磁唾壺 7世紀 H:11.6cm

唾壺（渣斗）は「渣斗は古代の貴族が宴会の際に、唾を吐いたり、魚や肉の骨を入れたことにちなんで名づけられた。また唾盃、唾壺とも言う。」「〔12〕と説明されるように廃棄のための容器であるが、ガラス製、金属器製も含め、高級品として流通・使用されたことは、10世紀末に編纂された宋代の筆記小説にも見えるところである。〔13〕この小説中の「美夫人」薛靈藝が涙を溜めた「玉唾壺」はあるいは白磁、青磁などの陶磁器製であったとも考えられよう。これら青磁の唾壺は日本でも平城京から出土している。〔14〕

日本に将来された唾壺は、おそらくは江南地方で焼成された越州窯系の青磁が多かったのではないかと推測されるが、唾壺の形は10世紀に入ると、大きく変化する。〔写真 〕のような上碗部の口がすぼまった蓋付きのものではなく、上碗部が大きく開き、胴腹部が扁球形の型式が現れる。〔写真 〕はそのような越州窯の唾壺の優品が韓国で伝世された例である。（『世界陶磁全集 12』小学館 1976,pp.50より転載）



〔写真 〕 青磁蓮唐草文唾壺 10世紀後半から11世紀 韓国国立中央博物館所蔵
H:12.0cm D:20.0cm

路菁氏は「この器は中原では旧式であったが、遼代にはかえて盛んに用いられた。」とされるが、氏が4つの型式に分類している契丹国時代の唾壺は、広く捉えれば皆この型式に属する。〔12〕

つまり10世紀後半に多く現れる契丹陶磁の唾壺は、隋、唐代初期に華北の、おそらくは邢州窯などで生産された〔写真 〕の旧型式ではなく、唐末・五代以降に現れる上碗部が大きく開いた〔写真 〕のような新型式の唾壺だったと考えられる。〔図A〕は後者に属する遼上京博物館所蔵の白磁唾壺（林東・北山で1990年出土、高さ13.0cm、上碗部直径17.0cm）である。〔15〕この型式の唾壺は陳国公主墓の人物壁画の中にも描かれている。〔16〕

唾壺は10世紀の日本にも将来された記録が残る。『仁和寺御室御物実録』の天曆4年（950）の条に、青茶垵提壺壺口、（略）青瓷鉢壺口有輪、（略）

白茶垸唾壺壺口。〔17〕

と見える。「青瓷」はこの場合、「あをし」つまり日本で焼成された緑釉陶器を指すので、この唾壺が平安時代に輸入されたことがわかる。その型式はこの文献史料からは読み取れないが、その参考例は現存する。東大寺正倉院が所蔵する御物にコバルトブルーのガラス製唾壺がある。この唾壺は『東大寺別當次第』治安元年(1021)十月一日の条に「前左衛門尉平致経、紺瑠璃唾壺を施入す。由縁あり。仰ぎて蔵に之を納む。」と記録されているものと同一品と考えられている。正倉院に納められたのが11世紀初め、作成年代は遡っても10世紀後半であろう。この唾壺も上碗部が開き、胴腹部の丸い型式である。

正倉院の紺瑠璃唾壺は西アジアで作られたものと考えられている。これがどのような経緯で日本にもたらされたかはわからないが、北東アジアの唾壺に10世紀から12世紀に同一の型式が見られることが確かめられる。契丹陶磁の唾壺も同時代の中国に対する「周縁性」という枠組みの中だけでは捉えきれないように思われる。

4. 契丹国時代の陶枕

「唐時代の陶枕は小型で、単純な方形のものが多く、北宋時代になるとしだいに大型化し、豆形や如意頭形、あるいは動物をかたどったものなど、多種多様な器形があらわれる。〔18〕と定義されるように、陶枕もその器形が多様な陶磁器である。日本へは三彩の方形枕が奈良時代から平安時代の初めに将来されているが、〔19〕10世紀以降、北宋代の陶枕が輸入された例はほとんど知られていない。

陶枕は唐代においては、後に「邯鄲の夢枕」として知られるようになる呂翁が廬生に枕を貸す話の中に登場する。枕が中空になっており、端部に焼成時の破損を防ぐために孔が二つ穿たれているとの描写は、実際の陶枕そのものである。〔20〕

北宋では夏季の風物として士大夫に愛好されていた。〔21〕その趣味にこたえるために詩文が枕面に描か



〔写真〕如意形白地黒水文枕 12世紀
W:23cm D:31cm H:13.2cm
磁県都党郷冶子村出土、磁県博物館所蔵

れるものもあつたし、金の時代に入ると辟除のため、虎形に成形された枕もあつた。器形の多様化がこの時代の特色であり、それらの陶枕の多くが、華北の磁州窯系の窯場で生産されていた。

〔写真〕は如意頭形枕の一つである。(張子英編著『磁州窯瓷枕』人民美術出版社 2000,p.49より転載)一方、〔図B〕は遼上京博物館所蔵の白磁陶枕である。長さ20.5cm、最低高8.5cm。彭善国氏によれば、「枕は紀年が明確な墓葬出土例が無いが、同じく副葬された鶏冠壺から、11世紀初期と考えられる。枕の型式はほぼ同一で、枕面は長方形で、枕面の下はややくぼみ、枕面が屋根状を呈する。側面から眺めると逆台形に見える。中原地方で五代宋初に流行した型式であり、連雲港市の五代墓出土品と類似している」と言う。〔22〕〔23〕

確かに内蒙古自治区、遼寧省各地の博物館に収蔵されていた陶枕もこの型式が多く、11世紀初めの北宋における陶枕の多様な型式に比べ、その展開に乏しい。契丹国では実際の生活では使用されず、「尸枕(副葬品)」として用いられたのかもしれない。

いずれにせよ、陶枕に関しては、華北において唐末・五代の10世紀に流行したタイプが契丹陶磁において長期間にわたって好まれていたことがわかる。その点においては遼代絵画に見られる「周縁性」が陶磁器にも適用することができるかもしれない。契丹陶磁が同時代の北宋における陶磁器の器形・型式をそのままは受容していなかった例と言えよう。

5. むすび

契丹陶磁の性格をめぐっては、さまざまな立場から検証が加えられているが、現在のところ、まとまりのある解釈・定説が存在しない状況である。

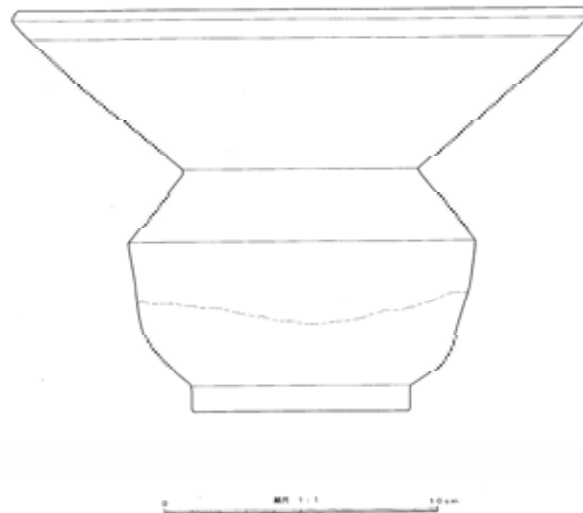
契丹陶磁においては、数量の少ない、稀な器形と言ってもよい唾壺と陶枕であるが、生産された型式から考えると、唾壺は当時、最も流行していた型式を受容し、生産・使用していたと考えられるのに対し、陶枕は保守的なまでに唐代・五代の10世紀以来の型式を用いていた。その使い分けには契丹国の社会に由来する何らかの要因があったと考えられる。今後、その要因とは何かについて考えてゆく必要があるが、その作業には同時代の朝鮮半島や日本を含む周辺諸国での陶磁器の生産と使用との比較が欠かせない。一つの器形についても、大きく言えば、西アジア、内陸アジアから北東アジアにまたがる地域における事例から考えなければ、契丹陶磁の複雑な多様性を見落としてしまうことになる。

契丹陶磁における唾壺と陶枕の例においては、当時の契丹国の社会は同時代の隣国・宋の社会の影響を強く受けながら、意識的にせよ、無意識的にせよ、その文化を取捨しながら受容していたことが窺われ

る。その文化変容の過程、内容を追うことによって、契丹国の特質が見えてくるのではないかと考えている。一つの可能性として、10世紀から12世紀の北東アジアの中で、契丹国が「周縁」にありながら「るつぽ」としての性格を有していたのではないかと

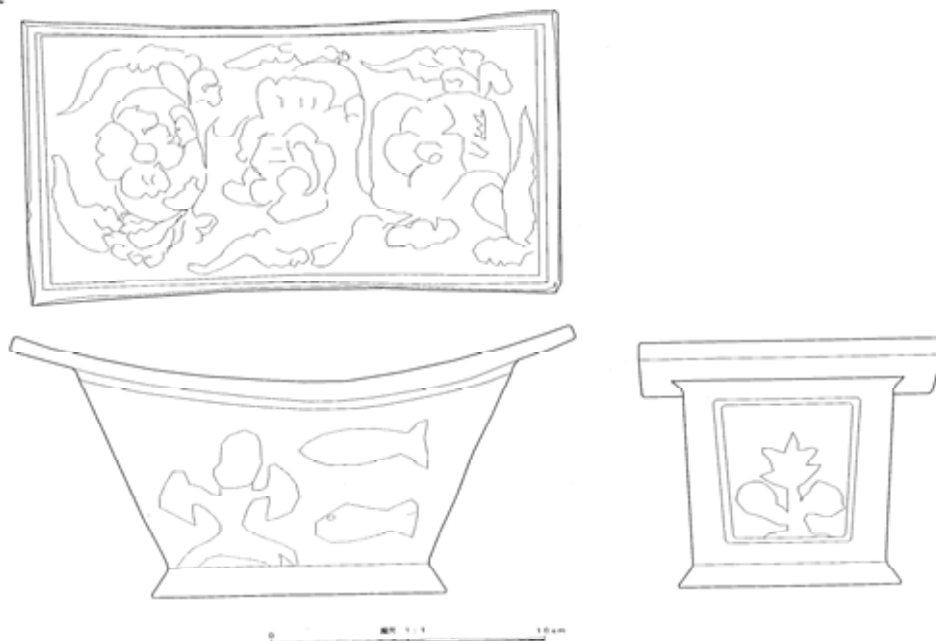
考えている。今後、実証的な例をより多く探すことが求められる。

遼上京 唾壺



[図 A] ステレオ写真による白磁唾壺の立面図（遼上京博物館所蔵） 撮影・図化：株式会社エムズ

遼上京 枕



[図 B] ステレオ写真による白磁陶枕の立面図・平面図・側面図（遼上京博物館所蔵）
撮影・図化：株式会社エムズ

[謝辞]

所蔵文化財の撮影を許可いただいた中国・内蒙古自治区赤峰市「遼上京博物館」の王未想館長はじめ、関係各位にお礼申し上げます。

[付記]

本稿は公益信託西田記念東洋陶磁史研究基金平成21年度助成金および神戸市立工業高専平成20年度共同研究費(研究助成)奨励研究18「遼・金・元(10-13世紀)の鉛釉陶器生産と瑠璃瓦生産の基礎的考察」による成果の一部である。

註および参考文献

- [1] 町田吉隆「契丹国(遼朝)の陶磁窯とその特色」町田吉隆編『契丹陶磁 - 遼代陶磁の資料と研究 - 』朋友書店 2008, pp.10-11.
- [2] 黒田源次、杉村勇造『遼の陶磁』平凡社 1958, p.1, p.7.
- [3] 杉村勇造『遼の陶磁』平凡社 1974, p.93, p.110.
- [4] 三上次男「渤海と遼の陶磁」『世界陶磁全集 13』小学館 1981(のち『三上次男著作集 4 中国陶磁史研究』中央公論美術出版社 1989, p.101.)
- [5] 三上次男「渤海・遼・金・元の陶磁器生産とその歴史的背景」『世界陶磁全集 13』小学館 1981(のち『三上次男著作集 4 中国陶磁史研究』中央公論美術出版社 1989, pp.106-107.)
- [6] 佐藤雅彦「遼の陶磁」『中国陶瓷全集 17』月報 上海美術出版社 1986
- [7] 閻万章「遼代陶磁」『中国陶瓷全集 17』上海美術出版社 1986, pp.154-175.
- [8] 李紅軍『遼代陶瓷 鑑定與鑑賞』江西美術出版社 2003, p.11.
- [9] 小川裕充「遼・西夏の絵画 総論」『世界美術大全集 東洋編 5 五代・北宋・遼・西夏』1998, p.125.
- [10] 弓場紀知「陶磁器」『世界美術大全集 東洋編 5 五代・北宋・遼・西夏』1998, p.237, p.242.
- [11] 尾野善裕「唾壺」『歴史考古学大辞典』吉川弘文館 2007, p.733.
- [12] 路菁『遼代陶瓷』遼寧画報出版社 2003, pp.114-115.
- [13] 『太平廣記』卷 272「薛靈藝」
薛靈藝常山人也。年十五容貌絶世。郡守以千金賈賂聘之。入宮、靈藝泣別父母、以玉唾壺盛淚。及至京師、壺中淚凝如血。
- [14] 矢部良明「隋・唐の文化と陶磁」『世界陶磁全集 11』小学館 1976, p.189.
「平城京の調査では、奈良三彩や須恵器などともに、越州窯の青磁が出土している。東一坊の溝から隆平通宝などとともに出土した唾壺はその一例である。薬師寺西僧坊では、奈良三彩、緑釉、灰釉陶とともに、中国製の白磁、青磁や長沙窯の青磁水注が発見されている。平城京の唾壺は、調査関係者は伴出品より九世紀としているが、そのものは八世紀まであげることでもできよう。」
- [15] ステレオ立体写真による撮影作図を行った。詳細は重森博「ステレオ写真を活用した文化財図化技術とその応用」を参照。町田吉隆編『契丹陶磁 - 遼代陶磁の資料と研究 - 』朋友書店 2008, pp.23-26.
- [16] 内蒙古自治区文物考古研究所・哲里木盟博物館編『遼陳国公主墓』文物出版社 1993, p.8.
- [17] 『仁和寺御室御物実録』一卷 尊経閣叢刊本 1931
- [18] 今井敦「陶枕」『歴史考古学大辞典』吉川弘文館 2007, p.833.
- [19] 三上次男「中国の陶枕 - 唐より元へ」『楊永徳収蔵・中国陶枕展図録』1984(のち『三上次男著作集 4 中国陶磁史研究』中央公論美術出版社 1989, pp.222-238.)
- [20] 沈既濟「枕中記」『文苑英華』卷 833
翁探囊中枕、以授之曰、子枕吾枕當令子適如志。其枕青瓷竅其兩端、生俛首就之見其竅。
『文苑英華』そのものは宋代初 10 世紀末に編纂された。
- [21] 張耒「謝黃師是惠碧瓷枕」『柯山集』卷 10 武英殿聚珍版集本
鞏人作枕堅且青、故人贈我消炎蒸。
持之入室涼風生、腦寒髮冷泥丸驚。
夢入瑤都都玉城、仙翁支頤飯未成。
鶴鳴月高夜三更、報秋不勞桐葉聲。
我老耽書睡苦輕、邊牀惟有書縱橫。
不如華堂併玉屏、寶鈿耀斜雲鬢傾。
- [22] 彭善国『遼代陶瓷の考古学的研究』吉林大学出版社 2003, pp.175-176.
- [23] 南京博物院等「江蘇連雲港市清理四座五代北宋墓葬」『考古』1987 年第 1 期